

## 紅河デルタ 地理学ベースの農村開発

第5回 最終回

### 農村社会を支える自立性と形式主義の柔構造

野間晴雄

この連載も今回で最終回を迎えることになった。ベトナムでドイモイによる変貌がいちばん目につくのは都市部である。街頭にあふれる物資、モーターバイクの洪水、建設ラッシュなどなど。しかし、もとはといえどドイモイは農村の変革から始まり、そのうねりは人びとの意識や行動まで変えていった。ベトナム人地理学者(第1回・46巻8号)、地方行政の末端を担う幹部(第2回・46巻9号)、日本人フィールドワーカー(第3回・46巻10号)、それぞれで、ドイモイの渦中にある紅河デルタ農村の現在を語っていた。また第4回・46巻11号は、われわれのミニプロジェクト「在地リーダー参画による農村環境システムの変動分析と地方行政リンクの試み」ベトナム紅河デル

タ、タインミンエン県を事例に」として、唯一投入した〈箱物〉であるパソコンをどのように地方行政を担う職員に教えたか、その講習頭末記である。

第3回の原田由起乃さんの記事を除くとあとの3回はいずれもベトナム人によるもので、やや堅苦しい印象を受けられたかと思う。原稿依頼した私としては本誌の性格や読者を考え、現在のベトナム農村をできるだけ生々しく本音で描いてほしいと注文をつけた。翻訳の稚拙さを差し引いても、ベトナム独自のフォーマリズム(形式主義)が良きにつけ悪しきにつけて出てきている。最終回ではその形式主義は決して堅物な石頭でなく、ベトナム特有のしなやかでソフトな融通無碍さと隣り合わせであることを、農村開発の現場から報告したい。

#### シンボルとしてのタットヌオック

4枚の組写真 まず次のA-Dの組写真を見ていただきたい。紅河デルタの典型的な農村風景だ。ハイズオン省タインミンエン県ゴークエン社ファンタン(Phan Tan)村、人口約1500人ほどの自生的な(むら)で、8月下旬に撮ったものである。6月に播種して10月に収穫する雨季米が青々と成長途上の時期である。水路から水田へ灌漑して

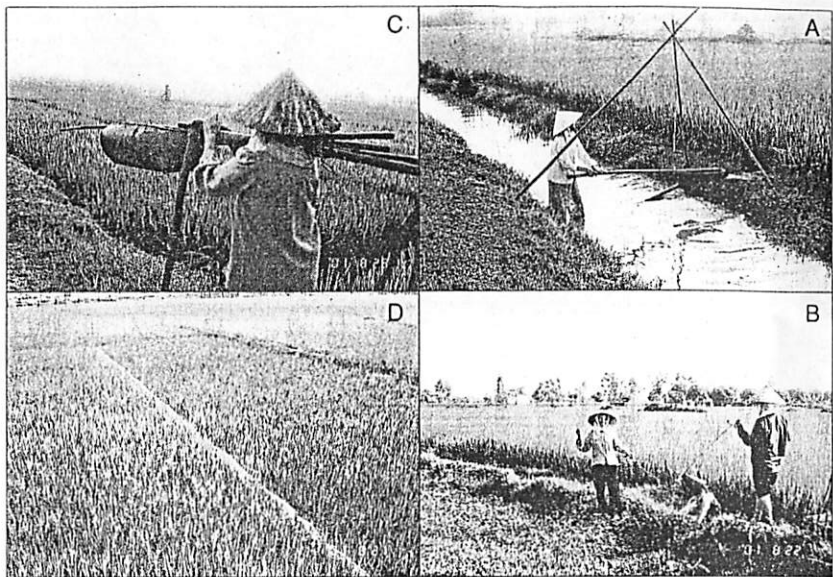


写真1 タットヌオック4題 (2001年8月)

いる農具をタットヌオック (tat nuoc) といい。

Aは水路をまたいで3本の竹竿をわたし、その先に取りつけた綱にブリキでしつらえた泥すくいのようなもので、水を押し出すように水田へ灌漑している光景。田面は水面よりも高いところにあるから揚水である。Bはブリキのパケツ型容器の4カ所に綱がついている。それを2人で器用に2本ずつの綱を操って灌水する。畦が切られて揚水がしやすくなっているのが見て取れる。Cは朝食後にタットヌオック一式をもって野良へ向かう農婦である。日焼けを防ぐ長袖の服と首筋に巻いたタオル、菅笠、期せずして別の時間に別人を撮ったのに、A-Cの女性の服装は驚くほど類似している。Dはタットヌオックが行われていた水田の1枚(ふつう日本では1筆という)の境界に、鼠害防止も兼ねたビニールを張ってある光景を撮ったもの。土を盛り上げた畦はふつう見かけない。もしあってもごく簡素で一時的なものだ。1筆の面積がたいへん小さく、細分されている。

水田区画の社会学 ここは標高が1-3mと低い堤外地である。仏領期に築かれた堤防は、取り崩されて道路として利用されている。タットヌオックは、江戸時代に筑後・佐賀平野のクリーク地帯で見られた光景でもある。しかし

両平野ではすでに藩政期により能率のあがる踏車が導入されてきた。大正期から昭和初期に移動式バーティカルポンプや電気揚水機場が普及するまでの盛夏の風物詩が、この厳しい揚水労働であった。そんな日本の200年前がここにある。

ところが、この水田の耕起はほとんどが隣村の耕耘機所有者から日単位で借りて、一気加勢に大きなブロックごとで行う。旧ソ連が60年代に灌漑排水システム建設を援助した折、水田の大きな区画整備は完成させていたので、すこぶる都合がよい。耕耘機が入らない狭い田だけは水牛で耕起するが、これも借り牛である。水牛の借り賃は耕耘機よりも割高だ。耕起時にはDのようなビニールの筆界はもちろんなく、畦も一部は取り崩して耕起される。耕起の時機は村の合作社職員が指示する。

また稲が生育してくる8-9月、午後の日ざしが陰り始める時間帯には、農薬を入れた噴霧器をかついで田んぼの中で撒布する農民に多く出会う。とにかく昼食と昼寝時間を除いて、いつも田んぼには人・人・人である。ただ、子どもが草を食べさせるために水牛を引き連れて行く光景はない。農家には通常は、豚・アヒル・鶏が飼養されているだけで、牛や水牛はほとんどいない。現代の紅河デルタは

役畜を欠いた稲作農業であるが、豚や鶏は大切な農家の現金収入源となっている。

## 「水田」の意味の変質と副業の本業化

合作社の解体と土地配分 ファンタン村は1958年に1村内のソム(xom)といわれる地縁単位で実験的な合作社が開始され、59年から74年までは1村1合作社になった。74年には隣村のファムサーと統合してひとつの合作社を形成する。南北ベトナム統一後の社会主義建設がいちば高揚していた時期だ。しかし、その拡大合作社は3年後の77年にはゴークエン合作社という1行政村1合作社となるが、また90年にはもとの1村1合作社に戻った。

集団農業の改革は、81年の生産物農家請負制で、ある程度の農家の裁量が認められたことに始まる。88年の個人農家請負制では1年生作物作付け地(稲)では15年の土地使用権が認められ、いっそう「家族農業化」する。それが93年の共産党一〇〇号指示で水田の土地使用権を20年に延長するとともに、5つの「自由」として、譲渡・貸借・賃貸・相続・質入が認められた。「何でもあり」の家族農業がここに成立した。

ところがこの93年の改正土地法による各農家への土地配

分で、政府の指示を各行政村(社)がどう解釈して実行したかはまさにケース・バイ・ケースなのである。ゴークエン社では各村単位の配分である。ファンタン村の場合、93年当時に在村していた人には年齢・性別に関係なく1人あたり均等に1.7サオ(1サオは360㎡)ずつが配分された。ただし教師、軍属など給与所得者は除かれた。その際に村内の土地条件が異なるため、1カ所の耕地では不平等がおこることを防ぐ意味で村内耕地を3等級に区分し、それぞれの等級に耕地が分散することを基本とした。平均すると6から8筆に分散している。1人あたりの面積は村



写真2 ゴークエン社第1回スポーツ大会での婦人会による行進(2001年8月16日)

内の総耕地面積から算出されたもので、人口数の違いが配分面積の違いとなって現れる。その一方で、村内では平等原則が厳格に貫かれている。冒頭で説明したタットヌオックやビニール張りの筆界は、まさにこのような零

細かつ分散した耕地を、個々の農家が随時灌漑するための「装置」であった。むらという存在が農業の場では甦ったように見える。しかし日本の河川やため池灌漑のような村落内あるいは村落を超えた水利集団は存在しない。あれほどいくつもの社会組織が紅河デルタの村に重層的に存在するの(第3回参照)、これは一面では奇妙な現象である。すべての農村生活を統合していたといえる合作社が解体した現在、行政村である社の統合シンボルとして昨年始まった公的行事にゴークエン社スポーツ大会がある。上からの指示と言いつつも、婦人会、青年団、退役軍人会などの組織を介して、村の対抗意識と自立性が表出する。

米消費のエコロジー かつて水田は農家の食い扶(かき)であり富の象徴でもあった。しかし農地改革によって地主は消滅し、集団農業を担う農業労働者が誕生した。それがドイモイによって実質、自作農に転換し、「米作り」の意欲が増大するはずだった。米の生産量も高収量品種の普及と二期作の拡大によって、メコンデルタほどではないにしても紅河デルタでも拡大した。もはや自給はほぼ達成され、一部の農家ではローカルではあるが米の販売も行っている。しかしそれらの農家が上層農かという、むしろそうではない。才覚がないから米に依存しているとも見られている。

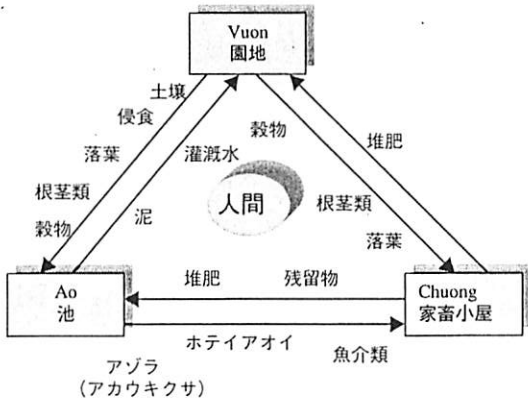


図1 VACの模式図 (Pham Xuan Namの図を改変)

穀物(米)、野菜類、葉草ハーブ類などである。アゾラはアカウキクサといわれる水田雑草だが、ベトナムでは古くから緑肥として用いられていた。アゾラに共生している窒素固定らん藻は窒素含有量が高く、淡水魚・豚・ア

2001年9月1日 朝から雨模様であった。11日間居候させていただいたゴークエン社主席バン氏の家を後にして、バイクの後ろにつかまってワークショップの会場へ向かう。徹夜で仕上げた2つの原稿——ひとつは今回調査したファンタン村での分析の中間報告、もうひとつはタインミンエン県農村開発実践に関するこれまでの成果の総括と今後の展望、いわゆるリコメンテーション(提言)という代物である。参加者のほとんどが、タインミンエン県人民委員

### ゴークエン社でのワークショップ風景

2001年9月1日 朝から雨模様であった。11日間居候させていただいたゴークエン社主席バン氏の家を後にして、バイクの後ろにつかまってワークショップの会場へ向かう。徹夜で仕上げた2つの原稿——ひとつは今回調査したファンタン村での分析の中間報告、もうひとつはタインミンエン県農村開発実践に関するこれまでの成果の総括と今後の展望、いわゆるリコメンテーション(提言)という代物である。参加者のほとんどが、タインミンエン県人民委員

立榮養研究所長が概念化したともいわれているが、もともと北部ベトナムや中国の広東・福建省などで行われてきた商業的な有機農法にその源があると私は考えている。図1はその概要の模式図である。人間と書いた部分から投入されるものは労働・技術・排泄物(糞尿)で、VACの生産物は肉(豚・鶏・アヒル・魚)、卵(鶏・アヒル)、根菜類、果樹(ライチ・マンゴー・パイナップル・バナナ)、

ここで今回の調査で得た興味深いデータがある。17軒のサンプルではあるが、年間の家族米消費量よりも餌として米を豚や鶏・アヒルに与える量のほうが多い農家が8軒とほぼ半数に達する。しかも、上層といえる農家6軒は例外なくこれに該当し、なかには2倍から3倍近い消費量の家もある。自分たちは在来種のおいしい米を食べながら、食味の劣る高収量品種は家畜・家禽の餌となっている。ドイモイの農業部面での牽引力は稲作以外の、家畜・魚・果樹・野菜部門なのである。そのことはこれまでの連載でも何度も触れられている。豆腐、精米、米麴、麵用のライスパーパーなどの農産加工、さらには木工、服仕立て、雑貨・食料品販売などの商業・サービス部門の拡大によるところが大きい。しかし、いずれも域内や村内の消費の拡大を、村内経済部門が支えているという側面が強い。外部経済との関わりという点からは、中部のダクラク高原のコーヒー農園や北部中国国境に近い山岳地であるラオカイ方面への移住や長期出稼ぎが中心となっている。

ベトナム流持続的農村開発 ゴークエン社はハノイからバイクだと90分、省都であるハイズオン市からはわずか50分で行ける。しかし公共バスの便はそれぞれ毎日1本しかない。途上国でよく見かけるバスやミニバスの屋根の上には

積み荷を満載して中心都市へ運ぶことはむずかしい。しかし今ベトナムの農村では、小回りのきくモーターバイク(日本のホンダの中古が圧倒的)が徐々に入りつつある。モーターバイクだと車が入れないような狭い悪路でも、何とか入っていきける。この機動力を使った商品の販売を考えると、ただモーターバイクで運べる商品は軽量で付加価値の高いことが必須条件となる。ファムサー村のフンさんが試みているマッシュルーム栽培は、自らの研究心を鼓吹して、生産ネットワーク作りまでを試みている点でも興味深い。課題はいかに販売活動を行うかである。タインミンエン県の下に農村の最低次の中心地を發展させ、情報をフルに活用した仲買商人への販売、集荷システムの確立が重要である。マッシュルームの乾燥も含めた加工法の工夫も必要となる。環境に負荷をかけない持続的ベトナム農村開発の新しい手法としてVACがある。これはベトナム語の園地(Vuon)、池(Ao)、家畜小屋(Chuong)の頭文字をとったもので、母屋を中心に背後に園地、前面に池、家畜小屋がエコロジカルに結合して多様な生産物・副産物を生みだし、それを販売することで多角的な家族農業経営を行おうとするモデルである。80年代にベトナム厚生省の国

ヒルの餌としても利用されていた。VACはこれを復活させた。





写真3 ゴークエン社主席バン氏のワークショップ発表 (2001年9月1日)

会の幹部、  
ゴークエン  
社の職員、  
各村の村長  
や重鎮たち、  
農業合作社  
の幹部らだ  
から、これ  
からどんな  
農村開発の  
実践が行わ

れるのかという「先走り」・「お土産」に関心がいくのは当然だ。だから言葉ひとつにも気を使う。

ホーチミンをたたえる歌でワークショップは始まり、型どおりの県人民委員会、ハノイ理科大学地理学部からのあいさつの後、過去1年余りの調査から得た知見をベトナム側2名、日本側2名が報告し、ゴークエン社人民委員会主席が社の現況と課題を述べた。人口・面積から始まり、通り一遍と見過ごされやすい形式的な演説のなかに、きら星のごとき本音が隠されているのがベトナム流である。

パソコン導入の意義 興味ある話題を枕に置きながらも、

についても、村の人たちの知識は驚くほど豊富です。昼には「あすか」という日本の国営放送(NHK)ドラマが放映されていますが、その舞台となったのは奈良と京都という古都です。その風景を皆さんはリアルタイムで眺めることができます。それもこれも電気のおかげです。インターネットも近い将来、村でも可能になるでしょう。

しかし、このような情報のグローバル化によって、仮想世界を徘徊するだけで、地に足をつけることや、事実の重みをヒューマンスケールの現実として認識することが困難になってきたことは現代社会の負の一面といえます。このプロジェクトでは、「箱もの」だけを与えてそれでよしとはしません。ハノイ理科大学スタッフの援助を得て、講習会をきめ細かく開催したのもそのためです。それでもまだ課題が残っているように思えます。

として、次のような利点と問題点を指摘した。第一にパソコン導入で事務書類の作成時間の大幅な節約ができた。しかしながら、ゴークエン社のような規模でも、農業、土地、合作社関係、保健衛生、教育、建設土木、村政などいろいろな種類の文書が発生するが、それをいかに分類し、重要性でランクづけし、すぐに検索できるシステムはうまく作用していない。社の公文書が村長の家に置かれ、村人が

こちらの主張ははっきりと表明しなければならない。そのさわりを英訳前の日本語から少し抜き出してみよう。

日本・ベトナム共同研究として、私が申請した旭硝子財団の研究助成が幸い2000年4月から2年間認められました。昨年7月に私が1週間この地を訪問して、タイムエン県にパソコン一式を寄贈しました。このパソコンによって、事務の効率化、環境指標情報の分析、地域計画策定のためのデータ集積と、地方行政を担う皆さんが積極的に参画できるようなシステム作りを考えていただきたいのです。その後、社レベルの実験として、ゴークエン社にもパソコン一式を配置し、3回にわたるパソコン講習会を県人民委員会で開催しました。幸い、その成果は目覚ましいものがあり、私も提供を提案した者の一人としてたいへんうれしく思います。

ベトナムでは電気が村にあるのはほとんど意識されなくなってきましたが、発展途上で電気が地域全体に普及していること自体珍しいことであり、将来、大きな変革をもたらし得る可能性を秘めているのです。今回、私はゴークエン社の主席であるバンさんのお宅に泊めていただいて、調査をさせていただきました。サッカー中継になると自然とみんながテレビの前に集まってきましたし、日本と韓国で来年開催されるワールドカップの話題

村長の出勤前に自宅を訪れて書類を閲覧している光景を何度か見てきた。社人民委員会の書棚が日本の町村役場に比べて驚くほど少ないが、今後、行政サービスの進展・複雑化とともに、社人民委員会を充実させる方策が必要となる。しかし湿気の多いベトナムでは書棚での文書保管も万全とはいえない。「文書目録」を作り、検索を容易にするとともに、寄贈したパソコンでの文書管理を進言した。パソコンのデータベースなら、日付順にならべるだけでも、たちどころに検索でき、追加修正も簡単だ。さらに一歩進んで、文書をスキヤナーで取り込み、CD-Rに焼き付ければ保管も半永久的となる。

農村の地図作り 地図作りもパソコンソフトを使って基図をいったん整備すれば、いろいろな地域データの入力できさまざまな表示が可能だ。今回は試みとして社と各村のA4サイズの道路・水路・主要施設などを記入した略図を作成した。今後、社の職員や地域の人びとが中心となりデータを集め、それを地域の開発に役立てる分析能力をつけることも今回のプロジェクトの大きな柱であった。われわれはその手法や結果をどう解釈するかについて助言はできるが、地域を担う人びとが地域にフィードバックできる組織・システム作りが鍵であることを訴えた。

第二の提言として、地域を広域に知る手段として、空中写真の有効な利用をあげた。ゴークエン社全体の大判の土地利用現況図がすでに作成されている。私の手元にある2000年の土地利用図では、作物年3作地、2作地、1作地という区分が農地に用いられ、稲、野菜畑、果樹園などの凡例となっていない。集落、公共建物、墓地などのほか、水面、利用されていない水面、変化した土地利用という凡例が注目される。「変化した土地利用」は実際に観察すると、ほとんどがVACである。しかしこの図はあくまでプロックごとの土地利用計画図で、実際の土地利用はもっと複雑である。何よりも1筆ごとの土地利用がわからない。

村にはこれ以上の詳細な地図はないが、ザイトウア (Zaitou) と呼ばれる専有耕地の名寄台帳がある。ただ、ここから各農家の専有耕地分布を復元することは容易でない。空中写真に写った筆界から簡易な地籍図を作成し、将来的には、交換分合を見据えながら、耕地分散に由来する灌漑、農薬・除草剤散布の非効率を軽減することが課題となる。さらに、微地形、土壌、水条件、集落立地分析、中スケールの地域計画などにも大きな威力を発揮する。

全社にパソコンが1台ずつ入るような計画ができたら理想的だが、今の日本の研究援助システムではなかなかこの

ような〈箱もの〉をたくさん配置することは困難である。ベトナム側にもそれ相応の負担をしてもらいながら、それぞれの社がたがいに競い合いながら発展していくことが必要で、いいものはいいと素直に誉め、それを目標にがんばることこそが地域全体の発展につながると確信しているという旨を演説した。

ルシアンサラダの世代 ワークショップという一仕事を終えて、帰国の前日、お世話になったお礼を兼ねて、ハノイ大堤防の堤外地にできた海鮮料理店で地理学部の要職者や副学長、国際交流部長などを招いて謝恩会を主催した。

前菜として、エビの丸ゆでやタイ湖でとれる大タニシのつば焼きなどとならんでよく出されるものに、マヨネーズたっぷりのジャガイモサラダがある。ヨーロッパではルシアン (ロシア) サラダといわれるものだ。今、大学の中核を担おうとしている50歳前の研究者にとって、留学場所はモスクワ、キエフ、サントペテルスブルグと違えど、最盛期には1000人以上が旧ソ連で奨学金を得て学んでおり、その連帯感も強い。社会主義のよき時代として、家が貧しい者も、農村出身者も、男女の別なく、がんばれば大学にも進学可能で、ソ連への留学も夢ではなかった。そこで結ばれたベトナム人おしどり研究者夫婦も多い。熱帯育ちの

彼らにとって厳冬のなかでエネルギーを蓄えるのが、ウォッカとこのルシアンサラダだった。ただ現代の20歳代の若者にはいまひとつ人気がない。

宴が盛り上がり、日本酒、ワイン、はては熊酒まで一気飲みが始まる。ロシア語とソ連流の地球科学的分野を包括した自然地理学がまだ頭の片隅にありながらも、英語もそこそこ話せ、インターネットやメールといった情報術を駆使できる世代でもある。「団塊の世代」といわれる現代日本の中核となっている人たちの下の世代になる彼らと私。そんな気安さからか見えない糸が結びつけたような連帯感が生まれていった。

戦争のなかで青春時代を送り、ソ連という第二世界のパラダイスに裏切られても、しぶとく新しい波についていくとすると気概は何よりも頼もしい。村で出逢った地域を担

うリーダーたちも多くは40歳代半ばであり、相通じるものがある。中島みゆきが歌う『時代』が口をついて出てきた時代はめぐり、回春する——ベトナム人の心意気の源泉を垣間見た思いでハノイを後にした。

[注]

(1) Pham Xuan Nam ed. *Rural Development in Vietnam: The Search for Sustainable Development*. National Center for Social Sciences and Humanities & University of British Columbia, Canada, Social Sciences Publishing House, Hanoi, 1999.

(2) 日本では「家鴨一水田農法」なども注目されている。

(3) 中島みゆき作詞・作曲。この歌がヒットした1975年はベトナム戦争が終結し、南北ベトナムが統一した年でもある。

のまはるお・奈良女子大学文学部教授 1953年京都市生まれ。アジアの稲作社会比較論が専門。ベトナム红河デルタ関係の論文として、「都市・農村関係モデルとしてのハノイ都市化とドイモイ以降の農村変化」(成田孝三編『世界の大都市圏(下)』大明堂、1999年、所収など。